

田辺福麻呂の久邇京讚歌と六合

塩沢 一平

1 はじめに 久邇京讚歌の特殊性

左に掲げた歌は、万葉集巻六に収められている「讚久邇新京歌」（以下久邇京讚歌とする）と題される歌である⁽¹⁾。天平十二年から十六年までのほんの数年ほどの間だけ都となつた久邇京を讚えた歌である。

讚久邇新京歌二首「并短歌」

i 現つ神 わご大君の 天の下 八島の中に 国はし
も 多くあれども 里はしも 多にあれども 山並
の 宜しき国と 川次の たち合ふ郷と 山城の
鹿背山の際に ii 宮柱 太敷き奉り 高知らす 布当
の宮は iii 川近み 瀬の音ぞ清き 山近み 鳥が音と

よむ 秋されば 山もどろに さ男鹿は 妻呼び響
め 春されば 岡辺もしじに 巖には 花咲きををり
あなおもしろ 布当の原 いと貴 大宮所 うべし
こそ わご大君は iv 君之隨 聞かし給ひて さす竹
の 大宮此処と 定めけらしも (6・1050)

反歌二首

三日の原布当の野辺を清みこそ大宮所 (二は云はく
ここと標さし) 定めけらしも (1051)
山高く川の瀬清し百世まで神しみ行かむ大宮所 (2052)

わご大君 神の命の 高知らす 布当の宮は 百樹な
し 山は木高し 落ち激つ 瀬の音も清し 鶯の 来

鳴く春べは 巖いはには 山した光り 錦なす 花咲きを
をり さ男鹿の 妻呼ぶ秋は 天霧あまきらふ 時雨をいた
み さ丹につらふ 黄葉もみぢ散りつつ 八千年に 生れつが
しつつ 天の下 知らしめさむと 百代ももよにも 易かはるま
しじき 大宮所 (一〇五三)

v 反歌五首

泉川ゆく瀬の水の絶えばこそ大宮所移ろひ往かめ (一〇五四)
布当山ふたごやま並見れば百代ももよにも易かはるましじき大宮所 (一〇五五)

をとめ等が續麻うみをか懸くといふ鹿背かの山時の往ければ京師みやこ
となりぬ (一〇五六)

鹿背かの山樹立こたちを繁み朝去らず来鳴さとよもす鶯うの声 (一〇五七)

狛山こまやまに鳴く霍公鳥ほととぎす泉川渡わたを遠み此処こゝに通はず (一〇五八)
はく、渡り遠みか通はずあるらむ

この久邇京讚歌は、不思議な歌である。以下にその主な点を挙げてみよう。

(1) 長歌からなる都城讚歌は、いくつかあるが、唯一二組の長反歌からなる都城讚歌である。

(2) 冒頭が、傍線部 i 「現つ神 わご大君」のように、集中孤例をなす「現つ神」から始まる。

(3) 宮殿造営は、一般に「宮柱 太敷きいます」のように天皇を主体とし、尊敬の形で表現するのに対して、当該歌では、傍線部 ii 「宮柱 太敷き奉り」のように謙讓語が用いられ、奉仕者を主体とした形が見られる。

(4) 第一長歌の傍線部 iii 「川近み……」以下の表現は、山川や季節の対が、川↓山、秋↓春の順となっていて、対句の常套的表現とは異なったものとなっている。

(5) 傍線部 iv のように、集中孤例をなす「君之随」という表現が見られ、その訓みと意味が問題となっている。

(6) 都城讚歌や離宮讚歌の長歌に対する反歌は、二首のものが多く、一首の場合も見られる。しかし当該歌は、傍線部 v のように、第二長歌に対する反歌が五首からなる。

(7) 二群の長反歌の対応は、都城讚歌ではない、二群からなる柿本人麻呂の石見相聞歌の構造を援用したものと考えられる。⁽²⁾

このように、非常に独自な色彩を持つ、長反歌である。今回は、主に(3)から(5)の問題を取り上げ、考えて

いくこととする。

2 宮柱 太敷き奉り

まず(3)から考えていこう。この点に関して、例えば吉井巖氏は、次のように述べている。すなわち、福麻呂以前の歌は、国見歌からの選択的発想につづけて、国見者または讚美の対象となっている天皇の主体的行為が歌われるのに対して、福麻呂歌では、

「宮柱太しきまつり」と宮柱を立てる行為が臣従者の行為として、謙讓の意を示す補助動詞マツルを付して表現されている。新京経営ということがこれでは天皇の主体的行為とはならず、その姿はきわめて受動的消極的なものとなっている⁽³⁾。

確かに、柿本人麻呂の吉野讚歌を都城・離宮讚歌の典型と考えるならば、左の①iのように「宮柱 太敷きませば」と天皇自身の行為として述べるものに比べて、当該歌の天皇讚美は間接的であるとも言えそうである。

① 吉野の宮に幸しし時に、柿本朝臣人麿の作れる歌

やすみしし わご大君の 聞し食す 天の下に 国は

しも 多にあれども 山川の 清き河内と 御心を
吉野の国の 花散らふ 秋津の野辺に i 宮柱 太敷
きませば ii 百磯城の 大宮人は 船並めて 朝川渡
り 舟競ひ 夕河渡る この川の 絶ゆることなく
この山の いや高知らず 水激つ 滝の都は 見れど
飽かぬかも (1・136)

はたして、本当に天皇の姿は「受動的消極的なもの」で「天皇讚美は間接的」なのであろうか。

当該歌は、「宮柱 太敷き奉り」と臣下の行為が述べられているものの、直後に「高知らず 布当の宮は」が配され、天皇の主体的行為も歌われている。柿本人麻呂の吉野讚歌第一長歌①では、iで宮殿の柱を立て統治する天皇の行為が歌われた直後に、波線部iiのように、朝夕に川に繰り出す姿を通して、大宮人の奉仕が語られている。

この天皇の統治と、臣従者の奉仕はもう少し注意が払われてよからう。宮廷讚歌・離宮讚歌を少しく追ってみることしよう。

②の「藤原宮の御井の歌」では、②iのように、藤原宮で統治を開始し、国見をする天皇の行為のみが述べられている。

② 藤原宮の御井の歌

やすみしし わご大王 高照らす 日の皇子 荒栲の
 藤井が原に i 大御門 始め給ひて 壇安の 堤の
 上に あり立たし 見し給へば 大和の 青香具山は
 日の経の 大御門に 春山と 繁さび立てり 畝火
 の この瑞山は 日の緯の 大御門に 瑞山と 山さ
 びいます 耳成の 青苔山は 背面の 大御門に 宜
 しなへ 神さび立てり 名くはし 吉野の山は 影面
 の 大御門ゆ 雲居にそ 遠くありける 高知るや
 天の御蔭 天知るや 日の御蔭の 水こそば 常にあ
 らめ 御井の清水 (一・五二)

また、後に示した③の「藤原宮の役民の作れる歌」では、
 ③ i のように国見をしようとし、統治しようとする天皇の
 意志を述べる形で、天皇主体の行為が述べられている。また、
 波線部③ ii のように、役民の奉仕も語られている。しかも
 この奉仕とは、伐採した材木を筏にして運搬するという宮
 都造営に関わる行為に他ならない。当該歌でも ii 「宮柱
 太敷き奉り」という新都造営に関わる臣下の行為に続いて
 i 「高知らす 布当の宮は」と天皇の統治が語られており、

同様な関係とも言えなくはない。

③ 藤原宮の役民の作れる歌

やすみしし わご大王 高照らす 日の皇子 荒栲の
 藤原がうへに i 食す国を 見し給はむと 都宮
 は 高知らさむと 神ながら 思ほすなへに 天地
 も 寄りてあれこそ 石走る 淡海の国の 衣手の
 田上山の 真木さく 檜の婦手を もののふの
 八十氏河に 玉藻なす 浮かべ流せれ 其を取ると
 ii さわく御民も 家忘れ 身もたな知らず 鴨じもの
 水に浮きゐて わが作る 日の御門に 知らぬ国
 寄し巨勢道より わが国は 常世にならむ 凶負へる
 神しき亀も 新代と 泉の河に 持ち越せる 真木
 の 婦手を 百足らず 筏に作り 沂すらむ 勤はく見
 れば 神ながらならし (一・五〇)

左の④は、柿本人麻呂の吉野讃歌の第二長反歌であるが、
 ④ i で、宮殿で統治し、国見する天皇の統治行為が語られる。
 直後に④ ii で山神が捧げ物として花ともみじを簪すという
 形、及び川の神が川での釣果を献上するという形で、山川
 の神の奉仕が語られる。⑤の赤人の吉野讃歌でも⑤ i で簡

潔に天皇の統治行為が述べられ、⑤ ii で、宮廷に通う形で大官人の奉仕が語られる。

④

やすみしし わご大君 神ながら 神さびせすと 吉
野川 激つ河内に i 高殿を 高知りまして 登り立
ち 国見をせせば 暈はる 青垣山 ii 山神の 奉る
御調と 春べは 花かざし持ち 秋立てば 黄葉か
ざせり「一は云はく 黄葉かざし」 逝き副ふ 川の神
も 大御食に 仕へ奉ると 上つ瀬に 鵜川を立ち
下つ瀬に 小網さし渡す 山川も 依りて仕ふる 神
の御代かも 反歌 (I・三八)

山川も依りて仕ふる神ながらたぎつ河内に船出せずかも (三九)

⑤ 山部宿禰赤人の作れる歌二首并せて短歌

やすみしし わご大君の i 高知らす 吉野の宮は
暈づく 青垣隠り 川次の 清き河内そ 春べは 花
咲きををり 秋されば 霧立ち渡る その山の いや
ますますに この川の 絶ゆること無く ももしきの

ii 大官人は 常に通はむ

(6・九三)

反歌二首

み吉野の象山の際の木末にはここだもさわく鳥の声か
も (九二四)

ぬばたまの夜の更けぬれば久木生ふる清き川原に千鳥
しば鳴く (九二五)

これらの都城・離宮讚歌の例を見るに、②のように、天皇の宮廷での統治のみが語られる例もあるものの、統治は奉仕と一体化して語られることが①・③・④・⑤のように多い。ひとり当該歌が、特殊な作品とはいえないだろう。人麻呂の吉野讚歌第一長歌の「宮柱 太敷きませば」を統治の典型と見なすことから、「宮柱 太敷き奉り」を天皇の姿が「受動的消極的なもの」で「天皇讚美は間接的」と見なしているにすぎないと考えられよう。

ところで、田辺福麻呂歌集歌は、対句の多用や長対といった特徴があることがつとに指摘されている。この他に福麻呂歌集の特徴として、新しい枕詞の創出・伝統的な被枕詞を崩した新しい被枕詞の創出があることを、早く佐野正巳氏が指摘している。加えて、伝統的な句と句の組み合わせを崩した新しい句と句の組み合わせの創出・新しい表現の

創出について、近くは藤原芳男氏が指摘している。⁶⁾

当該歌は、人麻呂①における「宮柱」と「太敷きませば」という句と句の組み合わせを崩して、「宮柱」に対して「太敷奉り」という新たな組み合わせを作り出している。このことよって、田辺福麻呂は、天皇の統治を語り次に臣従者の奉仕を述べるといふ①・③・④・⑤の順序を逆転させた。のみならず臣従者の宮廷建築と天皇の統治という関係を、「宮柱 太敷き奉り 高知らす 布当の宮は」と連続させることよって、①に比して、より直截簡明な対表現とされていると考えられるのではないか。

辰巳正明氏は、「聖なる天皇が現れると天も地も人も(天・地・人)一体となり天皇を助けるのだというのは、まさに天人感応という理想世界の思想的根拠であった」と①や④を挙げながら述べているが、久邇京讚歌も人麻呂①の「宮柱太敷きませば」表現をずらした新たな表現の試みがあり、「宮柱 太敷き奉り 高知らす 布当の宮は」は「天人感応」の理念にも適うものとなっているといえよう。

3 常套的表現と異なる川と山、秋と春の対

次に(4)について考えてみよう。当該歌の第一長反歌を①、第二長反歌を②とし、主格の提示・国見の発想によ

る宮の提示など、上下対応する部分によって分け、示すと、左のように、非常にきれいな対応を示す。

<p>① (主格の提示) 現つ神 わご大君の</p>	<p>② (主格の提示) わご大君 神の命の</p>
<p>2 (国見の発想による宮の提示) 天の下 八島の中に 国はしも 多くあれども 里はしも 多にあれども ③並の 宜しき国と ④次の たち合ふ郷と ⑤城の 鹿背山の際に 宮柱 太敷き奉り</p>	<p>2' (国見の発想による宮の提示)</p>
<p>3 (川山にかかわる自然描写) A川近み 瀬の音ぞ清き B山近み 鳥が音とよむ</p>	<p>3' (山川にかかわる自然描写) 百樹なし a山は木高し 落ち激つ b瀬の音も清し</p>
<p>高知らす 布当の宮は</p>	<p>高知らす 布当の宮は</p>

4 (春秋にかかわる自然描写)
 C 秋されば 山もどろに
 さ男鹿は 妻呼び響め

D 春されば 岡辺もしじに
 巖には 花咲きををり

5 (2、4のようにすばらしい土地であるからこそ宮を久邇の地に定めたことを述べる)
 あなおもしろ 布当の原
 いと貴 大宮所
 うべしこそ わご大君は

君がまに 聞し給ひて
 さす竹の 大宮此処と
 定めけらしも

(一〇五〇)

反歌二首

4' (春秋にかかわる自然描写)
 鶯の 来鳴くc 春べは
 巖には 山した光り
 錦なす 花咲きををり

さ男鹿の 妻呼ぶd 秋は
 天霧らふ 時雨をいたみ
 さ丹つらふ 黄葉散りつつ

5' (久邇京の永遠不変性の希求による予祝)
 八千年に 生れつがしつ
 天の下 知らしめさむと
 百代にも 易るましじき
 大宮所

(一〇五三)

反歌五首

6
 三日の原布当の野辺を 清みこ
 そ
 大宮所 (一云、ここと標さし)
 定めけらしも

(一〇五一)

7
 山高く川の瀬清し
 百世にも神にしみ行かむ大宮
 所

(一〇五二)

6'
 泉川行く瀬の水の絶えばこそ
 大宮所移ろひ往かめ

(一〇五四)

7'
 布当山山なみみれば
 百代にも易るましじき大宮所

(一〇五五)

8'
 をとめ等が續麻懸くといふ鹿
 背の山
 時の往ければ京師となりぬ

(一〇五六)

鹿背の山樹立を繁み朝去らず
 来鳴きとよもす鶯の声

(一〇五七)

狛山に鳴く霍公鳥

泉川渡を遠み此処に通はず
〔一云、渡り遠みか通はずあ
るらむ〕

(二〇五八)

3の(山川にかかわる自然描写)を見るに、「A川近み 瀬の音ぞ清き」「B山近み 鳥が音とよむ」のように「川・山」となっており、常套な山川の語順に変化をつけているように見える(3は、その逆に「百樹なし a山は木高し 落ち激つ b瀬の音も清し」と「山・川」の順になっている)。確かに、先の赤人の吉野讃歌⑤は、つとに指摘されるように、反歌を含めて、山・川の順が繰り返されている。これに対して先の人麻呂の吉野讃歌①は、対句部分だけをみれば、「この川の 絶ゆることなく、この山の いや高知らず」というように「川・山」の語順をとる。一方で続く人麻呂の吉野讃歌④の対句部は「山神の」「川の神も」と「山・川」の語順をとる。

ところで、既に「1」の(7)に示したように、福麻呂は、二群からなる石見相聞歌の構造を援用している。石見相聞歌の一群が石見の海岸の描写を丁寧な叙述ののに対して、二群は既に一群で細かく描写されたものとして、簡潔

に歌い済ましている。同様に久邇京讃歌も、2(国見的発想による宮の提示)は、④で十六句を用いて丁寧な表現しているのに対して、⑤では、④でも用いられていた「高知らず 布当の宮は」の僅か二句で叙述していた。このように人麻呂歌に精通していた福麻呂が、同様に二群からなる、人麻呂の吉野讃歌における対句部の山川の語順を、久邇京讃歌に取り入れた可能性は十分にあるだろう。

また、当該歌④の「宮の提示部」を含め、五音を見ていくと、「**山**並の……」「**川**次の……」「**山**城……」「**A**川近み……」「**B**山近み……」のように山川の順となっている。つまり、五音のリズムのレベルでは山川の語順をとることとなる。人麻呂の吉野讃歌①の対句の順序を踏まえつつ、「宮の提示」部との続き方に合わせて、④の「自然描写」部における空間描写が「川・山」の順となったとも考えることができるだろうか。

4の(秋春にかかわる自然描写)「C秋されば……」「D春されば……」は、上述の語順に変化をつけた3に合わせる形で、時間描写が「秋・春」となった可能性が高い。実際、④の詳細な山川表現を省略した⑤の「宮の提示」部では、「自然描写」部3・4が、「……a山は木高し」「……b瀬の音も清し」「……来鳴くc春べは」「……妻呼ぶd秋は」のよう

に「山・川・春・秋」となっている。

このように当該歌^④は、一方で、「宮柱 太敷き奉り」と一般的な表現をずらした新たな表現につづき、また一方で人麻呂の三六を意識した「川・山」という常套をずらした表現を用いている。しかも、その表現は、当該歌内部のリズム的語順としては「山・川」に適用ものともなっている。「秋・春」は「川・山」を含む「自然描写」部という内部の關係において、「秋・春」の順として表現されている。それがまた、常套をずらした新たな表現として、享受者には感得されるものとなっていると考えられるのである。

4 臣下のことばを聞き入れる主君

ところで、久邇京讚歌には、他の都城讚歌や離宮讚歌に見られない、めずらしい表現として、先に「1」(5)として挙げた「君之随 所聞賜而」という表現がある。「所聞賜而」は「聞し給ひて」と訓みが確定しているが、「君之随」は、孤例である。舊訓「きみがまに」以来、「きみがまに」「きみながら」を中心として様々な訓みがあり、確定を見ない。しかも同じ「きみがまに」と訓んだ場合でも、『万葉考』では、「神随かみまがらと云に同」と君を聖武と理解するように注しており、中西『全訳注』では、「まに」は「まにまに」の略で

「君」は橘諸兄を指すとしている。また「君之随」を「きみながら」と同じく訓じた場合も、君を天皇とする説と諸兄と考える説とが、同様に並立している。窪田『評釈』は「君」は上の「大王」を承けて繰り返したもので、全体として「君である故に」としている。これには、武田『全註釈』・沢瀉『注釈』・『古典大系』・『古典集成』・『釈注』が従っている。

一方『古典全集』は、

君ながら―あなたの言われるままに。この「君」は諸注の多くは、大君とみるが、作者田辺福麻呂にとって主人である橘諸兄をさすとみる説による。久邇京の宮、また泉の郷は、元来、諸兄の別荘があった土地で、諸兄は広嗣の乱を機会に、藤原色の濃い平城京を離れようとしたのだ、といわれる。

としており、新編『古典全集』『全注』も、これに従っている。それでは、「君之随」はどう訓み、「君」をどちらに理解すればよいのだろうか。

「神随かみまがら有之（かむながらならし）」（1・50）^③藤原宮之役民作歌）や「神随（かむながら） 太布座而（2・1六七） 日並皇子挽歌）にみられる「神随」やそのバリエーションである「皇子随（みこながら）」（2・199 高市皇子挽歌）にあるように「随」は「ながら」と訓じられている。しかし、下田忠氏が、『之

「隨」をナガラと訓むのは、「之」の音・義ともに認められない」と述べ「田辺福麻呂が『君隨』とせず、『君之隨』と表記したところにはそれなりの意図があるとみななければならぬ」というところに注目すべきであろう。

一方当該「君之隨」に似た「君之随意（君がまにまに）」（3・四二一 市原王、4・七九〇 大伴家持 など）「公之随意（君がまにまに）」（13・三二八五 作者未詳）と訓まれる「君（公）之随意」がある。「随意」は、「久米禅師の、石川郎女を娉ひし時の歌」に「梓弓引者随意」（2・九八）とあるように「まにまに」と訓まれている。この場合も、田辺福麻呂は「君之随意」とせずに「君之隨」と「意」の字を削った意味合いを理解すべきであろう。

また巻十一に、

人眼ひとめも 君がまにまに（君之隨尔） われさへに早く起き

つつ裳すての裾濡れぬ （11・二五六三 作者未詳）

と「君之隨」に「尔」を添えて「きみがまにまに」と訓むものがある。とすると「隨」は単独では「まにま」と訓むべき字である可能性がある。ただし、人麻呂歌集略体歌に

風吹きて海は荒るれど明日と言はば久しかるべし君が

まにまに（公隨） （7・一三〇九）

とあり、同じ人麻呂歌集非略体の旋頭歌に

新室にいむろの壁草刈りに坐いまし給はね 草の如寄り合ふ少女をとめは
君がまにまに（公隨） （11・二三五一）

と「公隨」で「きみがまにまに」と訓ずる例や、「君がまにまと」（公之随意常）（9・一七八五 金村歌集）と「随意」を「まにま」と訓ずる例もある。しかしながら、「君之隨」は五音で訓むべき句である。「隨」を「まにまに」と訓むことは難しい。「君之隨尔」（二五六三）から「まにまに」を略した「まにま」と訓むことはできよう。しかし、これでも一字字余りとなる。「随意」は義訓ではあるが「隨」一字でも同様の意味を表していること、田辺福麻呂が「意」の一字を削ったことを考えるならば、舊訓のように「隨」を「まに」と訓んで「まにまに」と同じ意味を表したと考えることも不可能ではあるまい。ひとまず「君之隨」を「きみがまに」と訓むこととする。

さて、それでは、「きみがまに」の「君」はどちらを意味するのであるうか。

集中で「きみがまに……」と訓ぜられていた「君之随意」「公之随意」「君之隨尔」「公之随意常」の用例をみると、

たまきはるわが山の上に立つ霞立つとも坐うとも君がま
にまに（君之随意） （10・一九一二 作者未詳 春相聞）

のように、そのほとんどが、「君」を恋の相手を指すものと

しており、君を天皇とするものは、一例もない。さらに、金村歌集歌の巻九の一七八五番歌では、

人と成る ことは難きを わくらばに 成れるわが身
は 死も生も 君がまにまと(公之随意常) 思ひつづ

ありし間に うつせみの 世の人なれば 大君の
命畏み 天離る 夷治めにと 朝鳥の 朝立ちしつづ
群鳥の 群立ち行けば 留まり居て われは恋ひむ

な 見ず久ならば

のように、「大君の 命畏み」旅立っていくのが「君」であると詠まれており、天皇と君をはっきり区別していることがわかる。先述した下田忠氏は、福麻呂が君と呼んでいるのは大伴家持に限られ、天皇に対しては「おほきみ」と呼び、その用字も「君」の字を用いていないことを述べている。双方を鑑みるに、「君」は天皇以外の人物、つまり橘諸兄を指す蓋然性が高い。

とすると、当該「君之隨 所聞賜而」は、「君がまに 聞し給ひて」は、「橘諸兄君のお言葉どおりに、お聞きになつて」という意味となろう。なお、「所聞賜而」があることから、「君之隨」を「君ながら」と訓んで、「君」を天皇と解しても、「天皇である故に(橘諸兄のおことばを) お聞きになつて」という解釈になる。つまりどちらにしても、天皇が橘諸兄の

進言を受けると言う内容に落ち着くのである。

実は、臣下の進言を聞き入れ、都を定めるといふ叙述は、『文選』「都賦」に繰り返し登場している。

「西都賦」では、漢の高祖が、洛陽から長安に都を定めた経緯が語られている。その中で「奉春建策、留侯演成」(奉春策を建てて留侯は演成し)と述べている。これは、「奉春(=婁敬)」という兵士が要害の地長安が洛陽に勝ると「建策(=献策)」した。高祖の忠臣である張良がそれを推し進め、ついに都が長安に完成したという内容である。

また「東都賦」において長安を都とした叙述の中で、「當此之時、功有横而當天、討有逆而順民。故婁敬度勢而獻其説、蕭公權宜而拓其制。(此の時に當り、功横なるも天に當る有り、討逆へども民に順なる有り。故に婁敬勢ひを度りて其の説を獻じ、蕭公宜しきを權りて其の制を拓けり。)(天下を定める時にあたり)、そのときの高祖の戦功は道からそれた点もあつたが、それはけつきよく天意に合しており、その討伐は分にした点もあるが、けつきよく民心にかなつていました。したがって婁敬が地勢を考へて高祖に長安を都にするように説き、蕭何が天子にふさわしく宮殿を壮麗にした)と、やはり臣下が進言することが述べられていた。

さらに、「西京賦」においても、「自我高祖之始入也、五

緯相汁、以旅于東井、婁敬委輅、幹非其議、天啓其心、人
慧之謀。及帝圖時、意亦有慮乎神祇。宜其可定以為天邑。」我
が高祖の始めて入るに自ぶや、五つの緯相汁ぎ、以て東井に旅り、
婁敬輅を委て、其の議を幹し非り、天は其の心を啓き、人は之
に謀を慧ふ。帝の圖る時に及び、意亦神祇を慮る有り。宜なり其
の可とし定めて以て天邑と為すや。我が高祖がはじめて、関中に
入られたとき、五つの星が東井の宿に集まり、のちに婁敬は車を
捨て、高祖の洛陽にとどまろうとする考えを正しました。誠に
天がその心を啓示され、人もまた、高祖にそのはかりごとを教え
たのです。さて、高祖がみずから帝都のことを計画されるに及んで、
やはり、神祇のことを考慮に入れられ、天下を安定させるのに適
していることを考えられて、長安を都と定められたのです」と同
様な表現が見られる。

「君之隨 所聞賜而」には、天皇が臣下のことばをお聞き
入れになるといふ、他の都城讚歌や離宮讚歌に見られない、
唐突にも思われる表現が見られた。これは、皇親政治家橘
諸兄が、その別業が構えられていた久邇の地に遷都を進め
ようとしていた事実を絡めて、上述のように、田辺福麻呂
が『文選』都賦から着想を得、作歌したものだと考えられ
よう。

なお、『日本書紀』（天智即位前紀）には、賢臣朴市田来津

が「州柔、山険を設置き、尽に防禦とし、山峻高くして、
谿隘ければ、守り易くして攻め難き」と都を州柔にとどめ
るべきであると諫言したのにもかかわらず、百濟王豊璋が、
避城に都を移したため、滅亡したことが記されている。賢
臣のことばを聞き入れないで、滅亡する逆の例が残されて
いることから、『文選』都賦は聴衆の脳裏に容易に浮かぶ
ことであろう。そして婁敬と諸兄がオーバーラップするよ
うな形で理解されることになるだろう。

実は、これ以外にも久邇京讚歌と都賦には、関係が深い
点がある。例えば、「西都賦」の「圖皇基於億載、度（||慶）
宏規而大起。肇自高而終平、世増飾以崇麗、歷十二之延祚。
故窮泰而極侈。」（皇基を億載に圖り、度（||慶）宏に規りて大
いに起る。高自り肇て平に終り、世々飾りを増して以て麗を崇し、
十二の延祚を歴たり。故に泰を窮めて侈を極む。億年も続くよう
な基礎を計画し、ああ規模を廣大にして、都作りに着手したので。
高帝に始まって平帝に終わるまで、それぞれの時代に手を加えて壮
麗にし、帝位が十二代も長く続いたので、このうえなくぜいたくに
おごりを極めたものとなりました）という部分には、漢におけ
る皇位と都の長久が語られている。この部分は、一〇五三
番歌の最終部では、「八千年に 生れつがしつづ 天の下
知らしめさむと 百代にも 易るましじき 大宮所」（||今

後八千年にわたって 生まれ続けて天下を ご統治なさるだろうと 百年の後も 変わるはずがない 宮殿であるなあ) 予祝表現とはなっているものの、都城の不変性を述べる形で共通したものと なっている。

なお「度」の部分は、李善は、「小雅曰、羌、發聲也。度與羌、古字通。度或為慶也」と注している。「度」は發声を表す「羌きやう」に通う字であり、或いは「慶」とされ、「羌」と「慶」とは、いずれも感動詞となる。この「慶」は「ああ」という意味の感動詞にあたる。久邇京讚歌には、「あなおもしろ布当の原 いと貴 大宮所」(二〇五〇) Ⅱ ああ美しい (宮がある) 布当の原は とても貴い 宮殿は) 傍線部分のように、他の離宮讚歌・都城讚歌に類例を見ない感動詞を含む部分が存在する。これも都賦から着想を得たと考えると理解が届くところであろう。

つまり、久邇京讚歌は、他の宮城讚歌に見られた「天人感応」理念の対応のみならず、臣下のことばを聞き入れる点・感動詞といった点までも都賦を積極的に取り入れていたこととなる。

5 「久邇京讚歌」と「六合」

それでは、なぜ二組の長歌どうしは、「川山」「秋春」が、

折り返したような形で、「反対」の対句となっているのであろうか。

実は、これは、福麻呂が「六合」の考え方を取り入れたからではないかと考えられる。

その「六合」とは、字の如く、東西南北の四方と天地の六つの対応するものことで、つまり土地空間のことになり、国をも意味するものである。『呂氏春秋』審分覽には、「神通乎六合 德耀乎海外」(Ⅱ 君主の精神は、四方上下すなわち宇宙に到達し、主君の徳は、中華文化の圏外にも耀く)とあり、この『呂氏春秋』の高誘注には、「四方上下為六合」とある。

「六合」ということばは、万葉集中には見られないが、『古事記』に一例、『日本書紀』に五例見られる。いずれも国の意味で用いられており、「六合」は「くに」とも訓まれている。「六合」は、当時の日本文学の中に、見られることばであり、山が高く、川が低いとするならば「川山」の対は、「六合」の上下と関係するだろう。しかし、「秋春」といった季節とは対応しないように思われる。

しかし、「4」で「久邇京讚歌」と関係が深いものとして示した都賦である「蜀都賦」には、「帶二江之雙流、抗峨眉之重阻」と、都が二つの河川で帯の形で取り巻かれ険峻な山に囲まれているという、当該歌と非常に似通った表現に

続く部分に、「水陸所湊、兼六合而交會焉」（水陸の湊まる所、六合を兼ねて交會す。水流と陸地とが集中する地形であるので、一年の相応する十二の季節を併せもち、四時にも風雨に恵まれるところである）と「六合」の文字が見える。しかもこの「六合」は国の意味ではなく、季節の秩序ある変化と調和を述べている。

中島千秋『文選（賦篇上）』が引くように、実は『淮南子』の「時則訓」に注目すべき記述がある。それは、「六合。孟春与孟秋為合、仲春与仲秋為合、季春与季秋為合、孟夏与孟冬為合、仲夏与仲冬為合、季夏与季冬為合」である。季節の調和した組み合わせを「六合」と呼んでいるのである。ここには、「孟春」と「孟秋」、「仲春」と「仲秋」、「季春」と「季秋」が「合」を「為」している。

もちろん、『淮南子』は、『日本国見在書目録』にも載っており、福麻呂が作歌する当時来日していた。つとに言われるように『日本書紀』の冒頭「古天地未剖陰陽不分……」に、天墜未だ形せず、馮馮翼翼、洞洞水屬水屬たり。故に太始と曰う。太始虚雨郭を生じ、虚雨郭宇宙を生じ、宇宙氣を生ず。氣に涯垠有り。清陽なるは薄靡して天と為り、重濁なるは凝滞して地と為る。清妙の合專は易く、重濁の凝滞は難し。故に天先ず成り、地後に定

まる。（天文訓）

未だ始めより、夫の未だ始めより無有る有らざることに有らざる者有りとは、天地未だ割れず、陰陽未だ判れず、四時未だ分れず、萬物未だ生ぜず、茫然平靜、寂然清澄にして其の形を見る莫し。（倣真訓）

のように「倣真訓」天文訓の内容が見られるなど、『淮南子』の内容は、当時知られたものであった。福麻呂が目にしていた可能性は十分ある。

「春」「秋」の対は、福麻呂に先立つ宮廷歌人が吉野讚歌などで、既に用いており、また『風土記』にもその対が見られる。同様に「反對」のみで考えるならば、類似の例は、『詩経』（国風）にも見られる。

だが、福麻呂の対は、久邇京讚歌一首内部だけに留まるものではないのである。「3」に示した①②の対応部分を見れば明らかのように、A「川」に対してa「山」、B「山」に対してb「瀬」（川、C「秋」に対してc「春」、D「春」に対してd「秋」のように、①②長歌どうしの対応部分が「反對」の対となっている。上下の歌が、「3」のように、まるで真ん中を折り目とするように、整然としたシンメトリックな「反對」を形作っているのである。福麻呂は、漢詩文の知識も借りながら、一首の内部のみならず、二首に

「秋」と「春」を分けることによって、それをまさに二組の長歌の上下が、折り目を為してびつたりと対応するように、「反対」の対で対応させ、よりダイナミックな形でのシンメトリックな調和を作り出してたと考えられないであろうか。当該歌は、山川による「空間」としての調和のみならず、「春」「秋」に代表される「時間」までもが調和する理想的な都として、「久邇京」を讃美しているのではなからうか。

6 むすび

万葉時代の官僚は、つとに指摘されるように、その登用の条件として、すでに漢詩文を学んでいた。田辺福麻呂も卷十八題詞に「造酒司令史田辺福麻呂（四〇三三番歌）」と記される官僚歌人でもあった（「造酒司令史」は、「大初位上」相当の身分）。また、田辺福麻呂は、文章を司る「史」の姓を持ち、その職掌や出自から、まず漢詩文の素養が予想できるものである。実際田辺福麻呂は、「久邇京讚歌」に見られるように対句を多用するという形で、漢詩文の表現形式を取り入れていた。そのみならず、「久邇京讚歌」では、内容面でも『文選』の「都賦」に着想を得ながら作歌を行っていた。

しかも、福麻呂は、海彼の文学をそのまま取り入れてい

たわけではない。

取り入れた漢文の詩句を、その漢詩文の中の意味とは違った意味概念のものとして和歌世界に取り入れ、対句を二首で、折り目正しく「反対」の対で対応させる、ダイナミックな調和的世界を形づくっていた。また、福麻呂は、漢詩文の本文のみならず、注された内容をも、作歌に取り入れていたのである。

ところで、福麻呂が「久邇京讚歌」を発表したとき、それを享受するものたちの理解に、いかなることがおこったであろうか。

久邇京讚歌は、その都を建てた聖武天皇とその忠臣である橘諸兄、そして漢詩文を修得している官僚たちが享受した。もちろん天皇も皇子時代に漢詩文の侍講を受けていた。都城讚歌が披露されることだけで、まず『文選』の一連の都賦が脳裡に浮かぶであろう。そして、「久邇京讚歌」が披露されたときに、着想を得た「都賦」を脳裡に浮かべるのもでてくるであろう。

「4」で先述したように、一〇五三番歌の最終部に見られた久邇京の不変の予祝は、「西都賦」で述べられた漢の高祖からの皇帝と都城が長く続いたことを前提理由としているような表現であった。つまり、漢詩文の素養を持ち得た享

受者たちは、久邇京不変の前提理由としての「都賦」を含み込んだ形（もしくはオーバーラップさせた形）で「久邇京讚歌」をとらえていたのではなからうか。その叙法の中に、漢詩文を学んだ官僚歌人で「史」の姓を持つ福麻呂の面目が躍如しているのではないだろうか。

もう一度、「3」を見てみると、福麻呂歌は、山川・春秋のみならず、①「花」②「花」、③「鳥」④「鶯」、⑤「さ男鹿」⑥「さ男鹿」といった草木・鳥獸までを対応させていることがわかる。これは、『芸文類聚』（巻六・總載山）が引用する『韓詩外伝』の「仁者何以樂山 山者万物之所瞻仰也 草木生焉 万物殖焉 飛鳥集焉 走獸休焉 吐生万物而不私焉 出雲導風 天地以成 国家以寧 此仁者所以樂山」（仁者はなぜ山を楽しむのか。山は全ての物が仰ぎ見るからである。草木が生まれ、全ての物が増え、飛ぶ鳥が集まり、走る獸が休む。全ての物を生み出すが、私的なものではない。雲を出現させ風を導く。天地を生成し、国家を安寧にする。以上述べたことが理由となつて、仁者は山を楽しむのである）から、着想を得たものと考えられるのではないだろうか。他の万葉歌人も花や鳥を取り入れており、人麻呂の吉野讚歌が、ここから着想を得ているとする説もあるが、その中で福麻呂は『韓詩外伝』にあるように、草木・鳥獸のすべてを詠み込んでいたのである。

しかもこれを二首で対応させてもいるのである。

二組の長歌によって示させる繁榮は、山川・春秋に留まらず草木・鳥獸にまでわたる十全たる自然の繁榮として示されているのである。

福麻呂は、「六合」という概念を軸に、そのことが持つ空間的な調和のみならず時間的な調和も含めた形で、山川・春秋を二首に合わせるシンメトリックな調和の世界を叙していた。福麻呂が形象化しようとした世界は、『韓詩外伝』の取り入れにも見られるように、時間空間的な調和世界のみではなかったのではないか。

「2」で明らかにしたように、「宮柱 太敷き奉り 高知らす 布当の宮は」によって、臣従者の奉仕と天皇の統治という調和世界を冒頭から直截簡明な対表現として示していた。また、「4」で論じたように、「わご大君は 君がまに 聞かしたまひて」に臣下のことばとそれを聞き入れる君主といった奉仕と統治の調和が同様に示されていた。つまり、福麻呂は、久邇新都による全ての世界の調和を、二組の長歌を合わせる試みによって、表そうとしたのではないだろうか。

【注】

(1) 万葉集の本文は、中西進『万葉集 全訳注』（講談社文庫）による。なお、私訓を施したところもある。また、『文選』の

本文、訓読および和訳は、小尾郊一『文選（文章編）一』（全訳漢文大系 一九七四年）による。なお、これも私訓を施したところもある。

(2) 塩沢一平「田辺福麻呂の宫廷歌の基盤」〔『万葉史を問う』

一九九九年）。

(3) 吉井巖『万葉集全注』巻第六（一九八四年）。

(4) 坂本勝「久邇の新京を讃むる歌・荒墟を悲傷して作る歌」〔『セミナー』万葉の歌人と作品』二〇〇〇年）。

(5) 「田辺福麻呂論」『万葉集作歌と風土』（一九六三年）。

(6) 「田辺福麻呂の儀礼歌の側面」〔『万葉集研究』第十集 一九八一年十一月）。

(7) 「都城の景観」『万葉集と比較詩学』（一九九七年 初出一九九五年六月）。

(8) 「田辺福麻呂の新境地・表現の特質」中西進編『笠金村・高橋虫麻呂・田辺福麻呂 人と作品』二〇〇五年）。

(9) 例えば、「廓風」には、

A 鶉之奔奔 a 鶉之彊彊 人之無良 我以為兄
B 鶉之彊彊 b 鶉之奔奔 人之無良 我以為君

〔『鶉之奔奔』

のように、先の福麻呂歌のA「川」a「山」、B「山」b「川」、C「秋」c「春」、D「春」d「秋」と同じように、A「鶉之奔奔」a「鶉之彊彊」、B「鶉之彊彊」b「鶉之奔奔」が一作の中で対応しているものが散見されるのである。

(10) 辰巳正明氏は、柿本人麻呂の吉野讚歌①④（巻1・36～38）がこの部分を取り込んでいると考えている（『人麻呂の吉野讚歌と中国遊覧詩』『万葉集と中国文学』一九八七年）が、本文にも述べたように、草木鳥獸をすべて取り込んでいるのは、福麻呂の久邇京讚歌が先駆である。